

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月30日現在

機関番号：33910

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2011

課題番号：22710049

研究課題名（和文）SNS サイトを利用した環境保全に向けた市民の合意形成のための  
手法構築の研究研究課題名（英文）A Study on Method Development of Using a Social Networking Service  
(SNS) for Addressing Consensus Building of Civil Society for  
Environmental Protection

研究代表者：古澤礼太（FURUSAWA REITA）

中部大学・中部高等学術研究所・講師

研究者番号：70454379

研究成果の概要（和文）：本研究は、SNS サイトを利用した環境保全に向けた市民の「認識共同体」の発展や合意形成のための手法構築の研究である。2010年に愛知・名古屋で開催された生物多様性条約締約国会議(COP10)に向けて実施された SNS を利用した対話プロジェクトを事例として調査を行った。研究成果としては、事例調査の成果から、SNS が生物多様性保全の重要性等の問題意識を共有する主体間の情報・意見の交換に有効であり、「認識共同体」の拡大のための一手法として有効であることが確認された。しかし一方で、対立する意見の対話や合意形成に至るプロセスにおける SNS 利用の有効性を認めることはできなかった。

研究成果の概要（英文）：

The objective of this study is to seek methods of using a Social Networking Service for developing “epistemic community” addressing consensus building on solving environmental issues among civil society members. The research focuses on the Biodiversity Cyber Dialogue Project, using Social Networking Service (SNS), conducted by RCE Chubu as a case study. The research outcome shows a positive result of using SNS for exchanging information and building a human network (“Epistemic Community”) among the people who shares basic ideas of discussed issues such as the importance of environmental protection. Nevertheless, a positive effect was not observed to use SNS for debates and consensus buildings so far.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,900,000	570,000	2,470,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：文化人類学

科研費の分科・細目：環境学、環境影響評価・環境政策

キーワード：(1) 環境保護 (2) 生物多様性 (3) SNS (ソーシャルネットワークサービス)

(4) ESD (5) 持続可能な発展のための教育 (6) 市民参加 (7) 合意形成

(8) RCE-ESD (Regional Centres of Expertise on Education for Sustainable Development)

1. 研究開始当初の背景

本研究の問題意識には、環境政策の主体が

常に直面する、“グローバルな環境保全”と“地域の利益”との間の矛盾の問題がある。地域に

根ざした市民提案が環境政策に反映され、結果として、グローバルな環境保全へと発展させるには、いかなる手法が考えられるのか。地球環境問題をめぐる政治学者 P. M. ハース (1990) は、専門家集団の国際的ネットワークの果たす役割を「認識共同体 (Epistemic Community)」と名付け、地域の枠を越えた対話の重要性を説いた。近年、NGO や市民活動の発展に伴い、ハースの言う「専門家集団」の枠組みは拡大し、環境問題を取り扱うさまざまな認識共同体が発言・提案を行う時代に入った。

こうした中、環境問題解決や社会・経済との調和の取れた発展を目指して、国連は、「国連持続可能な開発のための教育 (ESD) の 10 年」(以降、「ESD の 10 年」) 計画を進めている。ここで言う教育とは、多様なステークホルダー間のネットワーク構築のための「学び合い」という意味を含んでいる。異なる立場の多様なステークホルダーが、対話と学びを通して、持続可能な社会を創造する力を養うものである。1992 年のリオサミットから 20 年後のヨハネスブルグ・サミットまでの間に、環境問題の解決が進まなかった現実を踏まえ、教育の重要性が認識された。

そこで、日本の小泉首相 (当時) がヨハネスブルグ・サミットにおいて日本政府から「持続可能な開発のための教育 (ESD) の 10 年」を提案し、同年の第 57 回国連総会で、2005 年から 2014 年までを「持続可能な開発のための教育 (ESD) の 10 年」と定める案が採択された。また、これに伴い、国連大学は、1992 年のリオサミットからの 10 年間で、環境問題解決に捗々しい発展がなかったことを、国連や国家主導で、地域住民への配慮が足らなかった点にあると反省し、ESD の地域拠点計画 (RCE: Regional Centres of Expertise on Education for Sustainable Development) を開始した。平成 21 年 10 月時点で世界の ESD 地域拠点 (RCE) は 66 か所を数え、地域内外での持続可能な発展に向けた教育や多セクターの相互理解を深める取り組みを行っている。現在、国連大学高等研究所では、世界 66 の RCE ネットワークで、テーマ別グループを組んでさまざまな課題に取り組んでおり、本研究が事例として研究対象とする「生物多様性」もその中のひとつである。

## 2. 研究の目的

以上の背景を踏まえた本研究の目的は、環境保全に向けた市民の「認識共同体」の発展や合意形成のためのツールとしての SNS 利用の有効性を明らかにするものである。

特に、世界 66 の ESD 拠点のひとつである中部 ESD 拠点(RCE Chubu)が、世界の ESD 拠点と連携して進める生物多様性サイバー

対話プロジェクトを事例に、「生物多様性の保全問題に関する市民提言に至るプロセスとしての地域の合意形成過程」を観察・評価する。また、多言語使用によるインターネット上での国際的な対話から、COP10 で、市民社会から国際社会に対して提案を行うプロセスを調査し、大規模国際条約会議における市民提案の発信に際して、いかにインターネット上の対話システムが機能するか、その可能性と課題を検証する。

研究の対象となる中部 ESD 拠点は、行政・教育機関・経済団体・NPO など、60 団体が登録してネットワークを構築している。活動の対象範囲は、伊勢・三河湾流域圏という自然環境区分を用い、さまざまな地域の問題と活動の情報交流をめざしている。このような取組の中から、多様な課題を持ち寄り、多様な主体が COP10 に向けて意見交換を行い、最終的には市民提案としての合意形成を試みる。こうした試みは、COP10 という大規模な国際条約会議を契機とした特殊な状況下での事例であるが、多様で多数の主体が関わる市民提案の成立や合意形成のプロセスを観察するためには、適した事例調査であると考えられる。

初年度の達成目標としては、「サイバー対話」を事例として、大規模国際条約会議を契機としたインターネット上の市民提案に向けた合意形成の過程を調査し、その成果と課題を明らかにすることである。また、次年度は、上記対話プロジェクトの反省点を踏まえ、COP10 開催地域の環境活動団体等を対象に課題の要因を明らかにすべく追跡調査を行い、研究目標である手法構築に向けた研究を進めることである。

## 3. 研究の方法

本研究は、中部 ESD 拠点が実施する生物多様性サイバー対話プロジェクトを事例として、SNS を利用した生物多様性保全のための対話プロセスを通じて、①COP10 開催時の宣言文作成に向けた市民の合意形成プロセスの観察、②意識変容調査、③市民提案内容の変容分析を行う。合意形成プロセスの観察は、COP10 に向けた日本国内の市民社会からの提言作成や、COP10 で開催される NGO フォーラムでの提言発表に向けて非政府系の主体が合意形成する過程で如何に SNS が活用されるかを調査する。そのために、国内外から生物多様性に関する有識者を募り、サイトへの誘導を行う。また、意識の変容調査としては、可能な限り対話プロジェクト参加者から聞き取りを行い、SNS 上での対話の有効性を分析する。また特に、異なる意見や認識の衝突に着目し、SNS 上での討論と対面対話の利点・欠点を比較分析する。また、市民提案が合意を経て変化・発展する過程に

における SNS 上の議論の内容分析を行う。

研究計画の概要は以下の通りである。  
平成 22 年度：●地域（伊勢・三河湾流域圏）における生物多様性に関する課題と解決のための事例の収集（映像資料を含む）、●COP10 に向けた市民提案の実現に向けたサイバー対話のウェブ・プラットフォームの整備および、対話・討論への誘導、●多言語によるサイバー対話のまとめと、COP10 における市民提案のための合意形成プロセスの観察。

平成 23 年度：●地域における生物多様性および持続可能性社会構築に関わる諸活動の追跡調査。●サイバー対話の成果を踏まえた COP10 以降の目標に向けた対話プロジェクトの補助。●南北対話実現に向けた海外事例の調査および有識者のサイトへの誘導。●IT 技術とサイバー空間を利用した合意形成と市民提案の手法に関する可能性と課題の検証。

#### 4. 研究成果

(1) 生物多様性保全および持続可能な社会づくりに関する対話ツールとしての SNS の有効性に関わる調査の成果

生物多様性サイバー対話プロジェクトは、主として日本語版 SNS サイトにおいて対話が行われ、COP10 開催時には、サイバー対話での議論から発展した『COP10/MOP5 開催地住民からのアピール』が発表された。

英語版サイバー対話サイトおよび日本語版サイバー対話サイトは、国際的には facebook、国内では mixi のような既存の大型 SNS サイト内に対話のスペースを確保する方法と、独自の SNS を構築することができるものとの 2 通りの選択肢があったが、カスタマイズの利点等を鑑み、日英いずれも後者の方法を選択した。英語版は、米国の NING サイトを利用し、日本語版は地域 SNS に広く活用されている OPEN SNP を用いた。英語による国際的な対話は、主として数種のメーリングリスト上で展開され、その要点が SNS 上に掲載された。英語版の対話用 SNS 登録者の多くは ROM（書き込みを行わず読むだけの参加者）であった。

一方、日本語サイトは、中部 ESD 拠点と連携した CBD 市民ネットワークのメンバーを含む国内の生物多様性保全に関わる活動家、研究者、市民等が参加した。日本語サイトでは、CBD 市民ネットの作業部会の一部が、ポジションペーパーの作成に SNS を利用するケースがあり、意見交換・情報交換の場として活用された。

COP10 最終日に記者発表された『COP10/MOP5 開催地住民からのアピール』の策定に当たっては、サイバー対話主催者はサイト上の議論を期待し、内容の一部は

SNS 上で議論された。しかし、異なる意見の討論や合意形成に向けた議論という側面では、サイト上での衝突を避けて、対面での直接的な意見交換やシンポジウムやフォーラム等での討論が行われる傾向が確認された。サイト上で、意見の衝突による議論の深まりやその結果としての合意形成の実現という状況はほとんど確認されなかった。

COP10 開催時には、対面対話として多種多様なフォーラムやシンポジウムが開催されたが、サイバー対話から派生したフォーラムシリーズも開催された。これらは、中部 ESD 拠点の個人ネットワークである中部 ESD 拠点推進会議と CBD 市民ネットワークの共催で実現したもので、生物多様性に関わる多様なテーマで計 19 回のフォーラムを開催した。対面対話の成果は、COP11 に向けた SNS 上の対話の素材として用いられる。

COP10 終了後は、サイバー対話や一連のフォーラムの成果を踏まえ、新たに 2012 年にインドで開催される生物多様性条約締約国会議 COP11 に向けた国際的な対話プロジェクトを中部 ESD 拠点推進会議が主体となって開始した。この第 2 期サイバー対話プロジェクトでは、サイトの使用方法が広く認知されている既存の SNS サイトを利用することとし、facebook 内に対話スペースを設置した。筆者は、このサイトの管理運営を行うと同時に、COP10 における南北問題や伝統知・地域知をテーマとした対話を更に発展させるべく、ガーナ共和国およびベトナムでの現地調査を行った。ガーナにおいては、GMO 作物導入のリスク研究やマングローブ保全活動などの事例収集を行った。ベトナムにおいては、10 世代以上に渡って世代間で受け継がれる果樹園の里山的利用に関する調査を行い、両国において、調査対象者や RCE 関係者に対してネット上の対話サイトへの誘導を行った。

日本では、3.11 の津波および福島第一原発事故という、持続可能性の根本を脅かす災害・事故が発生したため、facebook のサイト上では原発等 3.11 関連のテーマで日本語・英語による議論が展開されている。筆者は引き続き対話プロジェクトの参加型調査を行う。

また、国連大学高等研究所でも COP11 に向けて「生物多様性と伝統地」をテーマに RCE のプロジェクトが開始されており、筆者は RCE ネットワークの事例収集にも参加している。

(2) 地域（伊勢・三河湾流域圏）における生物多様性保全に関わる市民活動の調査成果  
本研究の目的のひとつであった、SNS を用いた地域における生物多様性に関わる事例の発掘に関して、前述の対話プロジェクトで有効な結果を得ることはできなかった。この原因を解明すべく、地域の一環境活動に関わり

、情報交換や合意形成の過程でどのようにインターネットを用いることができるかについて参加型の調査を行っている。

調査対象の「なごや国際オーガニック映画祭」は、2012年2月19日に中部地域で初めて開催された本格的な有機農業の映画祭である。この映画祭は、2010年10月に、環境活動家、農業記者、大学教員、有機農業従事者などの個人が集まって運営委員会を発足させ、その後、実行委員会を結成し、市民によるボランティアによって実現した映画祭である。映画祭実行委員会は、有機農業を切り口として、生物多様性保全を含む持続可能な社会づくりを活動の目標としており、生物多様性条約締約国会議COP10経験者も実行委員会に加わった。映画祭の準備開始後の2011年3月に発生した原子力発電所の事故に関連して、イベントでは映画『ホピの予言』を上映し、講演会を開催した。また、有機農業の現場視察等のイベントを通じて学びの場を提供した。映画祭では、遺伝子組み換え作物に関する映画を含む6本を上映し、それぞれの映画上映前に対話のセッションを加えた。食の安全に不安や関心を持つ市民が700名以上募り、学びと交流を行った。

映画祭実行委員会は、SNSサイトfacebookを用いて映画祭のグループを立ち上げ、情報発信を行ってきた。映画祭への賛同者や有機農業実践者による、facebookの意思表示機能を用いた書き込みへの「賛同」の意思表示は確認されているが、対立する意見の書き込みや批判は皆無である。

### (3) 成果のまとめ

本研究におけるCOP10に向けた対話事業の事例調査の成果から、SNSが生物多様性保全の重要性等の問題意識を共有する主体間の情報・意見の交換に有効であり、認識共同体の拡大のための一手法として有効であることが確認された。しかし一方で、対立する意見の対話や合意形成に至るプロセスにおけるSNS利用の有効性を認めることはできなかった。

COP10後の調査対象である「なごや国際オーガニック映画祭」の事例では、実行委員会が映画祭の協力者や参加者を募るための情報発信を行っており、SNSの有効性が確認されている。Facebookの「賛同」の意思表示機能を用いた、書き込みに対する好評価を求めるユーザー意識に見られるように、SNSサイトは異なる意見を闘わせる討論の場としてではなく、同質の意見を持つ者同士の対話と情報共有の場としての利用価値の高さが認められた。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

① Reita Furusawa, 'Multi-Cultural Dialogue on Biodiversity Conservation using SNS -A case study of the Biodiversity Cyber Dialogue Project for CBD COP10 conducted by RCE Chubu-', "Business and Communities: Partners in Biodiversity Conservation", 2012 in press, Asia Regional Forum on Biodiversity

[学会発表] (計8件)

① Reita Furusawa, 'Biodiversity Cyber Dialogue Project conducted by RCE Chubu', in "Northeast Asia Reporting and Capacity Building Workshop on Monitoring & Evaluation of Education for Sustainable Development" (Organized by UNU-IAS and IGES), 20<sup>th</sup> Feb 2012, UNU-IAS, Yokohama

② Reita Furusawa 'Multi-Cultural Dialogue on Biodiversity Conservation using SNS -A case study of the Biodiversity Cyber Dialogue Project for CBD COP10 conducted by RCE Chubu-', in "Asia Regional Forum on Biodiversity -Encouraging Partnership between Business and Communities for Biodiversity-", 3<sup>rd</sup> Nov 2011, Dusit Thani Hua Hin Hotel, Thailand

③ Reita Furusawa, 'RCE Chubu and Bio-region Based ESD -Toward 2014 World Conference on ESD-', in "2011 The 4th RCE Asia Pacific Continental Conference", 2<sup>nd</sup> Nov 2011, Sirindhorn International Environmental Park (SIEP), Thailand

④ Reita Furusawa, 'ESD and Biodiversity Conservation -The Cases of Youth Activities in RCE Chubu-', in "International Youth Day: Inspiring the Next Generation of Researchers in Sustainability", (Organized by UNU-IAS), 12<sup>th</sup> Aug 2011, UNU, Tokyo

⑤ Reita Furusawa, 'Biodiversity Conservation and Regional Challenges -The Case of RCE Chubu (Regional Centres of Expertise on Education for Sustainable Development) in Japan-', in "The 11th Tripartite Environment

Education Network (TEEN) Workshop”,  
15<sup>th</sup> Mar 2011, Sino-Japan Friendship  
Environmental Protection Centre, Beijing,  
China

⑥ Reita Furusawa, ‘RCE Chubu and ESD  
Dialogue on Biodiversity’, in “The 3rd  
Asia-Pacific RCE Meeting“, 25<sup>th</sup> Jan 2011,  
Gadjah Mada University, Yogyakarta,  
Indonesia

⑦ Reita Furusawa, ‘RCE Chubu (Regional  
Centres of Expertise on Education for  
Sustainable Development) and  
Biodiversity’, in “ESD and Biological  
Diversity: How can ESD contribute to  
CBD? (CBD COP10 Side event organized  
by UNESCO/UNU-IAS), 20<sup>th</sup> Oct 2010,  
Nagoya Congress Center (CBD COP10),  
Nagoya, Japan

⑧ Reita Furusawa, ‘Developing  
Educational System for Sustainable  
Development -Chubu University and ESD-’,  
in “Workshop on Understanding and  
Integrating Sustainability into Teaching  
Module” (ProSPER.Net Workshop  
organized by Hokkaido University and  
UNU-IAS), 13<sup>th</sup> May 2010, Hokkaido  
University, Japan

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

古澤礼太 (FURUSAWA REITA)

中部大学・中部高等学術研究所・講師

研究者番号：7 0 4 5 4 3 7 9